

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

COCONUTS CLUB

April
2021 4

風雲！河和城



河和天神社

風雲河和城

KOWA

前号の山の神々めぐりに続き、今回も
「あまり知られていない近場の穴場探検スポット」を
取り上げたい。それは美浜町の河和城跡。
中世城郭マニアもビギナー戦国ファンも楽しめる
この史跡に、いざ出陣!

「お城山」に登ってみよう

ここ数年、城や戦国武将の人気は高まる一方で、城や城跡を探訪する人が増加していると聞く。知多半島にも多くの城跡があるが、ちょうど十年前に放送されたNHK大河ドラマ「江ノ姫たちの戦国」の影響で常滑市北部の大野城跡が注目を集めたくらいで、どこもあまり話題に上らないのが惜しいところ。しかし大野城跡以外にも、本誌エリアには気軽に見に行くことができて、かつ遺構も城を巡るドラマもなかなか面白い城跡が存在する。その代表格が、今回紹介する河和城跡だ。

とはいっても、日本の歴史上ではかなりマイナーな部類に入る城なので、地元以外の人はどこにあるのかわからない人が多いかもしれない。先述の大野城跡だと、山頂に天守閣風の展望台が建造されているのですぐ分かるが、河和の周囲は低い山が取り囲んでおり、下から眺めると、どれも城跡のように思えてしまう。

どの山が城跡かというと、知多厚生病院のすぐ東に聳える山で、地

元では「お城山」と呼ばれていた。標高は約三十六メートル。裾野から中腹にかけて山を一周するように車道が通じており、山の西側には山頂に通じる六十段ほどの階段が設けられているので、行くのは簡単だ。

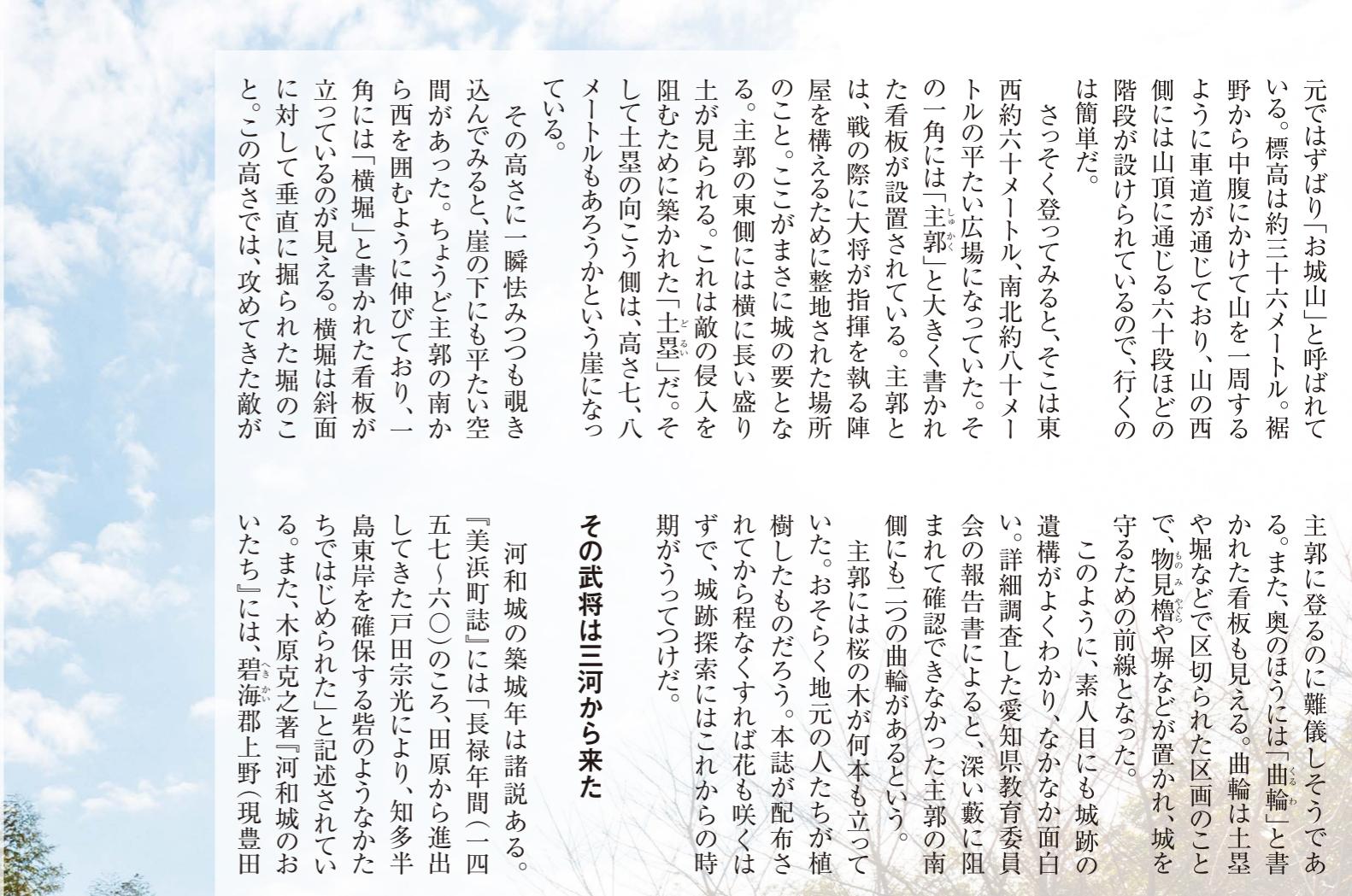
さつそく登つてみると、そこは東西約六十メートル、南北約八十メートルの平たい広場になっていた。その一角には「主郭」と大きく書かれた看板が設置されている。主郭とは、戦の際に大将が指揮を執る陣屋を構えるために整地された場所のこと。ここがまさに城の要となる。主郭の東側には横に長い盛り土が見られる。これは敵の侵入を阻むために築かれた「土壘」だ。そして土壘の向こう側は、高さ七、八メートルもあるうかという崖になっている。

その高さに一瞬怯みつつも覗き込んでみると、崖の下にも平たい空間があった。ちょうど主郭の南から西を囲むように伸びており、一角には「横堀」と書かれた看板が立つているのが見える。横堀は斜面に対して垂直に掘られた堀のこと。この高さでは、攻めてきた敵が

市上郷）を本拠としていた戸田宗光が文明二年（一四七〇）に知多半島に進攻し、今の河和・北方あたりに上陸して砦を築いたとしている。さらに、美浜町教育委員会が河和城跡の登り口に設置した案内板には「渥美半島の田原城主戸田氏によつて造られた戦国時代の城です」とだけ紹介されている。

文献によつて違うことが書かれてゐるので少しもやもやするが、中世の資料は多くないので、決定打がないのは仕方がない。ただ、三河発祥の戸田氏が河和城の祖であることは確かなようだ。とりあえず、その歴史がもつとも詳細に検討されてゐる『河和城のおいたち』の文明二年説に基づいて話を進めると、三河上野の土豪であった戸田宗光が、室町幕府を二分した「応仁の乱」（一四六七～七七）のさなか、同時に知多半島と渥美半島に進出したのが端緒である。

それまで知多半島南部は、大野城を居城とする一色氏が支配していたが、応仁の乱に巻き込まれたことでその基盤が揺らぎ始めた。この機に乗じて台頭したのが三河の戸田氏と一色氏配下の佐治氏だつた。



その武将は三河から来た

河和城の築城年は諸説ある。『美浜町誌』には「長禄年間（一四五七～六〇）」のころ、田原から進出してきた戸田宗光により、知多半島東岸を確保する砦のようなかたちではじめられた」と記述されている。また、木原克之著『河和城のおいたち』には、碧海郡上野（現豊田市）には、碧海郡上野（現豊田

主郭に登るのに難儀しそうである。また、奥のほうには「曲輪」と書かれた看板も見える。曲輪は土壘や堀などで区切られた区画のこと。物見櫓や塀などが置かれ、城を守るために前線となつた。

このように、素人目にも城跡の遺構がよくわかり、なかなか面白い。詳細調査した愛知県教育委員会の報告書によると、深い藪に阻まれて確認できなかつた主郭の南側にも二つの曲輪があるという。

主郭には桜の木が何本も立つていて。おそらく地元の人たちが植樹したものだろう。本誌が配布されてから程なくすれば花も咲くはずで、城跡探索にはこれから時期がうつつけだ。



城跡の北側には新江川が流れている。これは河和城にとつて天然の堀だったに違ない。今では河川改修でずいぶんすつきりとしているが、その昔はかなりおどろおどろしい雰囲気だつたとか。昭和三十年に発行された『河和町史』には「お城のすぐ下に藍碧潭々として、渦を巻き見上ぐれば千歳の岩壁屹立する。」



今なお残る城の遺構が戦国ロマンをかきたてる。

河和城周辺図



然として聳え、古老的の松柏は昼尚ほ小暗く、水面に陰鬱なる姿を写し見るから魔の住みそうな、「つの淵があった」などと書かれている。

その淵は「城ヶ淵」と呼ばれ、底なしとも言われていたという。その底の洞窟には龍神が棲んでおり、夜ごと川を下つて沖にある竜宮に遊びに行っていた。日照りが続く時に淵の下流に堰を築くと、海に行けなくなつた龍神が怒つて大雨を降らせる…という伝承もあるとか。

あるいは、龍神は河和城の守り神であったかもしれない。

全忠寺のルーツ「旧跡さん」

宗光が築いた砦は、宗光の子・憲

光が城郭としての形を整えたとも考へられている。憲光は父宗光が築いた田原城の城主を務めていた

が、永正六年（一五〇九）、嫡男の政

光に田原城を任せて河和に移つた。戸田家による渥美半島の支配状況が落ち着きを見せたので、次

は緊張が続く知多半島を何とかせねば、と考えたのだろう。

移住した憲光は河和城の初代

城主となり「河和殿」と呼ばれたという。憲光の没後は三男の親光が河和城主となり、さらにその後は繁光、守光と続いた。

歴代の戸田家とゆかりが深いのが、河和城の南約七百メートルにある全忠寺だ。南知多三十三観音の第三番札所になつてるので、地元の人でなくとも参拝したことがある人は多いだろう。丘陵地中腹に堂宇が建ち並び、風格ある山門と、緑に包まれたゆつたりした境内が印象的である。

全忠寺がいつ、誰によつて創建されたのかは、例によつて諸説ある。①戸田氏がこの地に初めて入つた際、田原にあつた菩提所を移した（尾張徇行記）

※戸田時代中期に尾張藩士が記した地誌

②憲光の嫡男で田原城主の政光が父の菩提を弔うため建立し、憲光の法号「孝心院殿信溪全忠大禪定門」からその寺の名を「全忠寺」とした（美浜町誌本文編第2章）

③もとからあつた小さな禅寺を、四代守光が拡張して創建した（河和町誌）

全忠寺では、天文三年（一五三

四）に守光が主従関係にあつた今川義元より忠義を讃えられて「全忠」の号を賜り、河和城の整備とともに全忠寺を創建したと、山門脇の由来記に記している。

共通しているのは、全忠寺は当初別の場所にあり、江戸時代になつてから現在地に移転したといふ点だ。元の所在地は河和城のすぐ北で、知多厚生病院と美浜町役場の中間の新江川のほとり。そこへ行ってみると、川辺の広場に小さな鳥居、手水舎、二つの祠、宝篋印塔（石塔）があり、小さいながらも聖地的な雰囲気が漂つている。

ここでの宝篋印塔は、古くから地元の人々に「旧跡さん」と呼ばれ、憲光の供養塔とも、守光の供養塔とも言われている。旧跡は全忠寺の跡地という意味だろう。川沿いの低地で水はけが悪く、たびたび水難に見舞われたのが現在地に移転した理由とされるが、宝篋印塔だけこの地に残されたのは、戸田氏にとってメモリアルな場所だったからだろうか。「河和町誌」には、旧跡さんに不敬な振る舞いをすると、小雨が降り、夜には無数の怨霊が提灯を手に現れ、その人は病魔に冒されるという伝説がある、と書

最後の城主と、城の最後と

もうひとつ、全忠寺とともに守光が整備したと伝わるものに河和天神社がある。河和城跡の東約五百メートル、国道247号沿いに鎮座しており、例年ならば今頃は、二台の山車が巡行する河和まつりの準備が進められているところ。しかし、新型コロナウイルスの影響で、今年は開催をとりやめ、神事のみ行われることになつていて。コロナ禍が終息して、来年は開催されることを願うばかりである。

河和天神社は、古くは海辺に祀られていたことから「浜天神」と呼ばれていた。もとは小さな祠が建つてゐるだけだったが、守光が河和城を整備した際、社殿を寄進して大己貴命と少名彦命を祀つたと伝わっている。社殿によると、天正四年（一五七六）のことだという。

人物だったようと思われる。寺や神社を整備したのも、宗光から數

07 COCONUTS CLUB

えておよそ百年も根拠地としてきた河和の地と領民に、深い愛着があつたからだろう。

しかし、世の流れは守光と河和城を歴史の舞台から消し去つた。信長の死後、急速に勢力を拡大した豊臣秀吉は、最後まで抵抗していた小田原城（現神奈川県小田原市）の北条氏を天正十八年（一五九〇）に攻撃する。全国の有力武将が参戦したこの戦いに守光も加わったのだが、守光は小田原で討ち死にしてしまうのである。

さらに驚くことが起きた。守光戦死の報が河和にもたらされるとなぜか村人たちが河和城を襲い、城を破壊してしまつたのだ。城主に不満があつたのか、それとも裏で糸を引く者がいたのか？

城主不在の城には、守光の妻と嫡男・万千代がいた。母子は一旦野間大坊に逃れ、やがて叔母を頼つて江戸へと向かう。妻は今の東浦町にあつた緒川城を本拠としていた水野氏の出身で、叔母は水野忠政の娘於大の方、つまり徳川家康の

実母である。徳川家の庇護のもと育つた万千代は、水野の姓を受け継いで水野光康を名乗る。関ヶ原の合戦翌年の慶長六年（一六〇二）、家康から河和郷千四百六十石を下賜され、故国に戻つて領主となつた。その後、戸田改め水野氏は現在の国道247号河和橋の南東付近に広い屋敷を構え、代々そこに住んだなどという。

河和への帰還は守光の妻の強い要望により実現したとも言われるが、いわば追い出された場所へ戻りたかったのはなぜなのだろうか。もしかすると、夫・守光がやり残したことを見子に成し遂げてほしかつたのかもしれない。それは、これまで前線基地として常に緊張の中にあつた河和の村を、平穏な理想郷として発展させることだったのでないだろうか。武力衝突と権謀術数が渦巻く戦国時代、美しく豊かな里で民と共に生きた戸田氏代々が見た夢…。

謎に満ちた河和城は、そんな大河ドラマのような物語を夢想させる。



謎に包まれた歴史のドラマは身近な場所にある。